

口唇口蓋裂の既往は中耳炎や上気道炎（いわゆる風邪）のリスクファクターとなる —子どもの健康と環境に関する全国調査—

黒坂 寛

顎顔面の胎児発生過程において口腔と鼻腔は二次口蓋（お口の天井の部分）によって分離されます。口唇口蓋裂（口唇裂、口蓋裂、口唇口蓋裂のいずれかを含む）の場合はその過程が阻害されて口腔と鼻腔がつながった状態で出生します。この状況は外科的に改善可能ですが過去の研究から口唇口蓋裂があると耳管（耳と口をつなぐ管）が狭くなることで中耳に細菌やウイルスが感染して炎症を起こす感染症のひとつである中耳炎になりやすい事は知られていました。しかし罹患率は人種による差が大きく日本人における中耳炎のなりやすさは不明でした。また中耳炎以外にも口腔から感染する上気道炎（風邪）などの感染症に対するリスクなども不明でした。

この研究では口唇口蓋裂（口唇裂、口蓋裂、口唇口蓋裂のいずれかを含む）の既往が中耳炎や上気道炎のなりやすさに関するかを調査しました。その結果、口唇口蓋裂のお子さんは1歳までに中耳炎に約2.7倍、上気道炎に罹るリスクが約1.3倍高くなることがわかりました（図1）。口唇口蓋裂があるお子さんには、生まれてから長期間にわたって多くの診療科による包括的な治療が必要です。そのため、成長の各段階でどのような医学的な配慮が求められるかを、継続して研究していくことが重要です。この様な研究が本邦で行われたのは初めてであり日本人において口唇口蓋裂の既往がある場合に中耳炎、上気道炎の罹患に注意を払う必要性を示唆しています。

図1. 口唇口蓋裂の既往と一歳時までにおける中耳炎と上気道炎の発症リスク比

